僕の親友は幽霊です

小羽海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕の親友は幽霊です

【Ｎコード】
Ｎ２２６２ＢＡ

【作者名】
小羽海斗

【あらすじ】
いつも僕の斜め上に見える親友は幽霊だった。

（前書き）

始めに。
この作品はＢＬではありません。
断じて違います。

いつから側に居たのかはよく自分でも分からない。だがいつも、僕の斜め上という定位置に彼は居るのだ。居る理由も不明の変なゴーイングマイウェイの青年。それが自分にしか見えていない事に気づいたのはそれからずっと後の話だった。

――――――――――――

寝坊した。
別に僕だって好きで寝坊したのでは無い。まさか夜中の間に目覚まし時計の電池が切れるなんて誰だって予想外なはず。
しかも今日の朝補習は小テスト。勿論朝学校に着いてから勉強するつもりだったので何もしてない。おまけにその先生は遅刻をしたら廊下に立たせると言うやな奴。
そして現在時間は七時半。
時計を見た瞬間脱力してしまう。ああ、今日は何てついてない日なんだろう。
『生きてる奴は勉強とか学校があって大変だな』
全くもってその通りだ。だが、彼への返事をこの人目の多い大通りで返す訳にはいかない。
『お～い、無視するな～。俺は無視されたら死んでしまう程寂しが

りやなんだぞ』
勝手に死んどけ、喉まで出かかったその言葉を呑み込むのは至難の技だった。危ない、危ない。今までの苦労が台無しになる所だった。が、それ以前に彼はもう死んでいるのだ。
僕の斜め上に居る数代前に廃止になったダサい長袖の制服を着ている黒髪の青年が居る。少しでも僕の気を引きたいのだろうか。僕の目の前で手を振ったり、髪を引っ張ってみたり（普通の人には髪が独りで立っている様に見えるらしい）等とあらゆる手段で対抗してくる。
この長い付き合いになる青年の幽霊は悪い奴では無いのだが……。
『なぁなぁ隼（はやと）。頼むから無視するなよ～。寂しいし暇なんだよ』
「……うるさいぞ、昴（すばる）」
人通りの多い所ではとてもうるさい。ただでさえ生きている人間の会話もうるさいと言うのに。
『俺はな、可愛くてきゅーとなウ・サ・ギさんなの！ＯＫ？』
　最近読んだ本によるとウサギは寂しいと死んでしまうらしい。つまり、自分は寂しがりやだから構ってくれないと死んでしまうと言う彼なりのアピール。らしいと言えばらしいのだが……、かなり面倒だ。
「それ以前に人の話を聞け、馬鹿昴（すばる）」
そう小声て返事を返してやる。彼に返事を返すのは気が進まないが、返した方がちょっかいも無くて楽だし、遅刻したと言う事を忘れられるからだ。
『何言ってるんだよ。俺年上じゃん』
年上だったから何でもありかよ。昴（すばる）にはもうちょっと空気を読むと言う素晴らしい気遣いはないのだろうか。いや、それがあったら逆に不自然だ。
しかもこの件に関しては昔からだからもう訂正は効かないだろう。
『隼（はやと）？』
そう僕が考えているとは知らず、無邪気に笑い、心配する昴（すばる）。

「……」
こう無邪気に笑われては悪口一つ言えない。その笑顔にすっかり毒気を抜かれてしまった僕。いやはや情けないものだ。
だが、忘れてはいけない。今日の寝坊の原因は昴(コイツ)だ。
真夜中に『なぁなぁこれ何？ジェンガって言うのか……。ならジェンガやろうぜ！！』といきなり叩き起こされ、昴(すばる)が飽きるまで付き合っていた。そうしたらいつの間にか空が明るくなってきたので慌てて寝た結果がこれだ。
一体コイツはどこまでゴーイングマイウェイを発揮するのだろうか。
頼むから少し自重してくれ。
『あ、学校通り過ぎたぜ』
それはもっと早く言えよ。

――――――――――――――――

結局遅刻した罰として廊下に僕は立たされている。こんな事になるなら最初から朝補習サボればよかった。
『まぁ元気出せよ』
ぽんと慰める様に肩を叩かれる。斜め上には俺は遅刻に関係無いし～と言う風の昴(すばる)が。僕は目にありったけの殺意を込めて、
「誰のせいだと思ってるんだよ、お前は」
誰もいない廊下は声が響く。ある程度音量を下げないと教室まで声が聞こえてしまうから大分音量は下げた。
すると昴(すばる)は少しおちゃらけるのを止めた。やっと反省したかと思ったら、
『隼(はやと)のせいと見せかけて俺のせいだったりするんだな～。これがま

た』

……。前置き長いし、分かっているならもっと心から反省しろと叫びかけてまた我慢。落ち着け、ここで怒鳴ったら僕は空気と一人で話している変人じゃないか。それだけは何がなんでも避けなくてはいけない。

『あ、でも反省はしてないぞ』

「少しは反省しろよ！！」

少しは反省しろよ、少しは反省しろよ、と廊下に反響（エコー）する僕の声。

あ、ヤバい。遂に言ってしまった、しかも大声で。数秒後遅れて教室の扉が開き、

「幸坂！！」

授業中だったはずの先生が怒鳴りながら廊下に登場。僕は容赦ない説教（ついでに遅刻の分も）を喰らう事になった。

―――――――――――――――

『Ａ　ｄｅｍａｉｎ。少女達！』

自分の姿が見えていない女子に大きく手を振って見送る昴（すばる）。何故フランス語でまた明日と言ったのかは付き合いの長い僕でも不明だ。まぁ後から本人に聞いたら曰く、カッコいいから。

「……」

しかし今日は昴（すばる）のせいで酷い目にあった。朝補習には遅れて説教を喰らい、ホームルームでは担任から呼び出されと個別相談開始。全く……、人を変人扱いするな。

『なぁなぁ隼（はやと）。今日はブラックジャックを……』

どうやらまだ懲りてないらしい。
「お前のせいで一学期間の努力が水の泡だ。少しは反省しろ」
『じゃあツーテンジャックで……』
「人の話を聞けよ！そして何でお前がやりたがる物はギャンブルが多いんだ！！」
もう教室には人一人いないのだ。だから遠慮なく話せるとは言え、昴（すばる）の奴は人の話を全く聞きやしない。でも……、それでも昴（コイツ）は、気心のしれた数少ない僕の大切な友人なのだ。
『え？楽しいからに決まってるだろ。しかもこれもダメなのか。仕方ない……、ここは王道のババ抜きで！』
「……」
大切な友人何だが……、全く空気を読まない。と言うか読む気なんて一欠片もない。
「もう、予習が終わったら十二時まで付き合ってやるよ」
『マジか！マジだな！！よし、守らなかったら毎日《Ｊｅ　ｔ' ａｉｍｅ》って耳元で言ってやるぞ！！』
Ｊｅ　ｔ' ａｉｍｅ。フランス語で直訳すると私はあなたを愛して。何て、何て、何て、
「何て過激な事を言ってるんだお前は！破廉恥だぞ！！」
『うわぁっ！隼（はやと）、お前、それ死語…』
「うるさい、黙れ！！」
鞄に教科書と筆記具を投げ込んで教室を出る。勿論昴（すばる）は定位置である僕の斜め上。僕の親友は幽霊だ。でも誰よりも信頼出来て、悩みを聞いてくれる大切な存在。

（後書き）

部活で部雑誌を作ることになって書いた物。
ＢＬではない。友情だ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2262ba/

僕の親友は幽霊です

2012年1月5日19時47分発行